

おじいちゃんが
教えてくれたありがとう



藤沢小学校3年
うじ家 のぞみ

わたしには、ひいおじいちゃんがい
ました。わたしが、一年生の二月に天
国にいきました。わたしは、「でっか
いじいちゃん。」とよんでいました。
おじいちゃんは、目やこしがわる
くて、何回も入いんして手じゅつをし
ていました。足もわるくて、ベットに
いることがおかつたです。一人では
あるけないので車いすのついでいまし
た。

わたしは、何でも車いすをおすお手
つだいをしました。おじいちゃんをの
せた車いすはとてもおもいです。そん
な時おじいちゃんは、
「ありがとう。のぞみは力もちだな。」
とニコニコわらってほめてくれるの
で、力がわいてきます。お母さんも
「ありがとう。たすかるよ。」
と言ってくれます。わたしは、うれし
くて、くすぐったいようないい気持ち
になります。
おじいちゃんは、しゃしんをとるの
が、すきでした。
わたしが、七五三のきものをきて、
おみまいにいった時、
「ありがとう。よく来てくれたね。か

わいいな。」
と大よるこびで、何まいもしやし
んをとってくれました。わたしは、
ちよつとはずかしいけど、とてもう
れしかったです。

おじいちゃんとのさいこのおわか
れの時に、おねえちゃんと手紙を書
きました。わたしは、たくさんの「あ
りがとう。」をもらったので、「あり
がとう。おじいちゃん大すき。」と
書きました。お母さんとおばあちゃ
んが
「おじいちゃんがよろこんでいるよ。
ありがとう。」

と言いました。わたしが、やさしい
ことやしんせつなことをすると、お
母さんたちもうれしくなるんだなと
思いました。そして、「ありがとう」つ
て、力がわいたりやさしくなれたり
するまほうのことばだなと思いまし
た。

でっかいじいちゃん、天国でおさ
んぼしていますか。しゃしんをたく
さんとしていますか。わたしは、す
こしせものびて力も強くなりまし
た。これから、大きくなれば、車い
すもっと上手におせると思いま
す。こまっっている人や体のふじゆう
な人のお手つだいをしたいです。お
じいちゃんよろこんだかとおと「あ
りがとう」を思い出して、たくさ
んの人にしんせつにしてあげたいで
す。
でっかいじいちゃん、「ありがと
う」を教えてください、「ありがと

夢 なかるべからず

弘 則 さん
正 和 さん
植 竹 植 竹

銀色に輝く宿命



宿 命

銀色に輝く瓦は、上品で静
謐な感を醸し出す。焼成
前の瓦は、あたかもしなやかな
銀細工のアクセサリーのよう
だ。しかし、実際には一つひと

つの瓦は硬く、よく焼き締まり、
自重がある。故に近年では屋根
を葺く素材としては敬遠されが
ちだ。その瓦の道に敢えて突き
進む兄弟がいる。瓦職人、植竹
弘則・植竹正和。
二人は瓦作りを、宿命と呼ぶ。

譲葉の賦

赤城風のころ

この地方では、冬の間に北天にそび
える赤城山から吹き下ろす北風を赤
城風と呼ぶ。

三日間吹き荒れた赤城風が、よう
やく治まったこの日、儀八は大きく
張り出した額の下から、檜の実のよ
うな真ん丸の目を覗かせ、利根川の
下流から来るであろう船影を探して
いた。

江戸と北関東を結ぶ大動脈である
利根川水運。なかでも中瀬の河岸は、
遠く江戸からの荷が陸揚げされ、陸
路で秩父方面に向かう荷や、小舟に
乗せ換えられさらに上流に向かう荷
が集積し、多くの人々が集まる要衝
の地である。

儀八は、江戸の風を感じることが
できるこの中瀬の河岸が大好きだった。
「兄さー、船が見えたぞ」
「おう、安兵衛に伝えてくる、お
前はそこで待ってろ」そう言い残
し、一目散に走りだした兄勘助の後
姿を横目に見て、儀八は樹上でのつ
かの間の読書を楽しむため、もう何
度となく読み返し、ポロポロになっ
た書物を懐から取り出した。

桃井可堂伝

勘助と儀八の兄弟は、農作業が
一段落する冬場になると、勘助の
友である斎藤安兵衛の求めに応じ
て、斎藤家の家業を手伝うために
通うことを常としていた。中瀬村
延命地に在する斎藤家は、金融業
を営む一方で、多くの田畑を持ち、
数十人の使用人を使う近郷きつて
の素封家である。

船問屋から、到着したばかり
の荷を受け取り、やっこの思いで
斎藤家まで運び終えると安兵衛は
「また、吹き出してきたし、今日
はこのぐらいにしとくべえ」と勘
助に声をかけ、賃金を握らせた。
「そうさな、上がらさせてもらお
うかい。おい儀八そろそろ帰るぞ」
既にとつぷりと日は暮れ、赤城風
が頬を叩いている。

こんなとき兄弟は、吸い込まれ
そうな暗闇と吹き荒ぶ赤城風に負
けないように、いつのまにか覚えて
してしまった漢詩の一節を声高に
誦んじながら家路につくのだった。
時に西暦一八一〇年、後に可堂
を号することになる儀八がまだ七
歳の冬のことである。

進路の結論

人は、小さな頃から瓦が
生活の一部だった。父親
の代で4代目。明戸小学校の
低学年の頃から積み込みや、
プレスの手伝いをしてきた。
それが嫌な時もあったが、そ
れをするのが当たり前だった。



左が弟の正和さん、右が弘則さん

二人は進路に悩むことは
あったが、結論は初めから一つ
だった。伝統を継ぐといえど簡
単だが、それだけでは足りない、或
る力を感じての結論だった。

続けることの価値

瓦を生活の「根」の部分とし
て続けるため、逆に瓦作り
以外の仕事もこなしていかねば
ならない。しかし、二人は「た
とえ困難な道でも、瓦以外の選
択肢は考えられない」と即答す
る。

瓦が建築の素材として優れ、
その良さを知り尽くしている二
人。だから、たとえ他で作られ
た瓦でも、葺の波を見るだけで
嬉しくなる。その気持ち「続
ける価値」として、二人の胸に
輝き放っている。

夢七訓

夢なき者は理想なし
理想なき者は信念なし
信念なき者は計画なし
計画なき者は実行なし
実行なき者は成果なし
成果なき者は幸福なし
ゆえに 幸福を求める者は
夢なかるべからず※

(本文中の敬称は本人の承諾を得て省略しています)